

生きづらさを和らげ生活や人生を豊かにする日常会話の在り方

～よた話・あす話の勧め～ でこぼこ川柳*より

- ① こだわりも
よき計らいで
花開く
- ② よた話
余所の他人で
評論家
- ③ よた話
喜び楽しみ
趣味仕事
- ④ あす話
ありがとうすまない
皆なごむ
- ⑤ あす話
未来の話で
夢紡ぐ

*「でこぼこ川柳2019」(主催:いとぐるまの会)に出品した3句に2句を追加した拙作。

- ① 「よき計らい」とは、配慮ある対応のことで、それによって、「こだわり」も、より生産的・創造的なものに発展します。
- ② 「よた話」の一つ目は、余所の他人。この場に居ない、できれば縁の薄い(身近でない)他者のことで、いろいろ言っても、聞こえて傷つくリスクのない人のことです。
- ③ 「よた話」の二つ目は、喜び楽しみ。その子が、喜び楽しむことのできる、大好きなこと。今後、余暇を豊かにする趣味や、仕事につながることも期待できます。
- ④ 「あす話」の一つ目は、ありがとう、すまない。いわゆる謝意を表すことばで、これを言われて悪い気がする人はまずなく、自ずと心が和み癒されることばです。
- ⑤ 「あす話」の二つ目は、未来(あす)の話。もちろん、日が替わった明日のことだけではなく、直近のこの次の場面から、将来の夢まで、広く「今後についての話題」全般です。

- ①は、障害者差別解消法で提唱された「合理的配慮」のことです。
②、④は、考え方を柔軟にする意識の転換、③、⑤は、将来に向けた個性の伸長を意味し、やがてはライフスタイルの形成につながります。

④ こだわりの向こうに未来を描く ～意識の転換から個性の伸長を目指して～



発達障害の子どもによく見られる特性の一つに、物事にはまりやすい、いわゆる「凝り性」というのがあります。ゲームにはまってしまう子どももしばしばあり、保護者にとっては、心配の種となりがちです。

そこには、その子に特有の「こだわり」が絡んでいると考えられ、へたに介入しようとする、バトルとなり深みにはまってしまいます。(泥沼モデル)

※ 1～3ページの図中のイラストはいらすとや <https://www.irasutoya.com/>、イラストボックス <https://www.illustrat-box.jp/sozai/>、イラストAC <https://www.ac-illustr.com/>、及び、アニメーション天国・ぶろぐ <http://tamaokun7.blogspot.com/> より

長野圏域療育コーディネーター／言語聴覚士 安川 健治
〒380-0928 長野県長野市若里6-6-14 児童発達支援センター にじいろキッズらいふ
TEL 026-219-3781 業務携帯 080-8877-1709 E-mail k-yasukawa@nagano-shajikyoo.or.jp



- ひとつことに「こだわり」と言っても、いろいろな場面で、いろいろな形を取って、表現されます。上のイラストは、しばしば見られる行動の例です。
- 「こだわり」行動の最中、子どもの表情を見ると、へらへら笑っている場合もありますが、あまり楽しそうでなく、むしろ苦しそうな場合が多くあります。
- 子どもの本当の願いに沿った行動というよりも、不安から逃れるために、暇つぶし、かりそめの遊び場、逃げ場として、機能している場合が多いようです。
- 「こだわり」行動が繰り返される場合、そこには持続させている要因があり、それは、往々にして身近な大人の反応です。
- 身近な大人が、叱責・禁止*など強く反応すると、本人の混乱を招いたり、逆に褒められたりして、どちらにしても、「こだわり」行動をかえって強めてしまうことになります。

* 叱責・禁止や強い口調の指示・命令ではなく、「～します。」と、すべきことを、終止形で端的かつ冷静に伝えることは有効です。



- 子どもの「こだわり」行動を、身近な大人が何とかなくそうと躍起になると、かえって強めてしまうので、「こだわりにこだわらない」ことが極意です。
- 「こだわり」を減らそうとする「マイナス」の考え方ではなく、子どもにとって充実したよい時間を増やすという「プラス」の考え方こそが大事です。
- 「こだわり」行動そのものに対しては、つっぱってきたのをつっぱり返すのではなく、「暖簾に腕押し」、「柳に風」といった調子で、「受け流す*」ことが得策です。
- その上で、「こだわり」の考え方から解放され「いいこと」を考えられるように、次のページに示すような、考え方を「切り替える」のによい話題へと誘い、意識の転換を図りましょう。

* 「受け流す」とときには、肯定や共感ではなく、まして拒否でもなく、中立的に「そうだね～」というように、平板で横に流れるような語調で応ずることが有効です。また、悪態に対しては、子どものまっとうな心根を信じて、「また心にもないことを」と応じます。